

婚外結婚

丹羽文雄

婚外結婚

定価 九八〇円

発行日 一九八一年一月三十一日

著者 丹羽文雄

発行者 押鐘富士雄

発行所 株式会社三笠書房

東京都新宿区戸山町三五

電話東京二〇三局七七八一代表

振替東京三一三二〇九六

郵便番号 一六二

落丁・乱丁本は本社でお取替えします。明光堂印書局・サン企画・宮田製本

© Fumio Niwa Printed in Japan, 1973

0093-001149-8001

婚外結婚

丹羽文雄

三笠書房

目 次

ひとりだけの花嫁

九

弱気と卑怯

七

美しい居候

四

二つの家庭

七

抵抗

八

前後の出産

一七

よけいな存在

一三

波紋

一五

ある離婚

一六

二年間

一五

軽率

三五

新緑の候

二五

夏

二六

秘密

二九

家々の悩み

二二

荒療治

三七

夢

三九

秋の道

三七

婚
外
結
婚

ひとりだけの花嫁

名古屋駅についたのが、かなり夜更けであった。十二月の初めである。桑子は小さいトランクを下^{おろ}げ、ショールをかけ、コートは着ていなかった。ま新しい足袋^{たび}という出で立ちでもなかった。風が吹いていた。吹きぬけの駅の歩廊は、どこよりも風が強いようであった。額に垂れた髪をかきあげながら、掲示板を見て歩き出したが、行先の確定していない旅行者のようであった。階段を下りる桑子を、降車客が追い越した。はじめて下りた駅のせいもあり、はきはきとふるまえなかった。ためらい勝ちな、いかにも自信のない歩き方は、桑子の心の中をそのままあらわしていた。改札口を出たが、しばらくとまどっていた。ここは乗車口と降車口がはなれていた。乗車口の方にまわると、桑子は時間表の下に立った。桑子は腕時計をしていなかった。あたりの掲示板をながめた。そんなようすが、おいてきぼりをくらったひとのように、何となくひと目についた。家出娘のようであった。

「四日市にいくのには、どこで乗るのですか」
駅員をとらえると、桑子は訊^きいた。

「汽車ですか、電車ですか」

駅員は事務的に訊^ききかえした。桑子は苦笑した。用意のなかった質問であった。

「どちらでもかまわないのです」

「この時間では、電車の方が早いでしょ」

と、駅員は売店のある通路の方を指差した。桑子がはなれた。トランクを下^{おろ}げた、一米、六六ほどの、無肩の和服の女客を駅員は見送った。二十一、二歳だった。きものが地味すぎた。羽織は象牙色の無地であったが、その年齢にしては、似合わない色であった。ふだん着というのではないが、きものも羽織も帯も、年齢に合わせてつくったものでなく、たれかにもらったものの寄せ集めといった感じであった。トランクも相当に使われたものらしい。

桑子は近鉄の始発駅のある地下道に下りた。桑子から二、三間おくれで、五十年配の小柄な男が、桑子から目をはなさずについていた。その男は、桑子が駅員に訊^きねているとき、すぐうしろに立っていた。

切符を買って改札口を出るとき、桑子は四日市方面の電車かと駅員にたしかめた。五十男は桑子のすぐうしろにいた。あまいような口の利き方が印象的であった。

電車にのりこむと、桑子のそばに小柄な五十年配の男が腰をかけた。二人がけの座席であった。電車が動き出した。

地下鉄のようだと思つたが、この電車は地下から動き出して、やがて地上に出るのだった。

地上に出たとき、電車の騒音が足の下にかいくぐり、一括されたようにきこえた。しばらくのあいだ、窓の外のようにがよくわからなかった。窓に近い灯は目にとまらなかつたが、遠くに見える灯が動かないようにみえた。桑子は窓ガラスに顔がうつっているのに気がついた。左手で額の髪をかきあげた。青白いほどの肌をしていた。指がながく形がよかつた。爪の形もよかつた。娘らしく指のつけ根にえくぼが出来るのがふさわしかつたが、出来ない体質のようであつた。頸が細かつた。が、眉やまつ毛や髪は濃い方であつた。隣席の男は、桑子が左手で髪をかきあげた時、娘のわりに腕の毛が濃いのを見のがさなかつた。

——腺病質かな。

男は話しかけるきつかけを待った。桑子は目をあけていたが、自分の心の中を見つめているような顔つきだった。その目は何も見ていなかった。が、ときどき窓の外を見た。遠い灯をみると、心の中の焦点と遠い灯がひとつになるような気がした。おのれの運命を遠い灯に見たてるのか。桑子は隣席の男に注意をはらわなかつた。旅に出て、見知らぬ同乗者に用心をすることをわすれているようであつた。そのためかえつて五十男は、話しかける隙が見あたらなかつたようである。

揖斐川の鉄橋をわたっているときであつた。

「どちらまで……？」

何気なく男が訊いた。桑子はゆっくり五十男の方に顔を向けた。

「四日市までまいります」

「四日市ですか」

五十男は知っていたのである。男には、桑子の使い古したトランクや、ちぐはぐなきもののようにすから、ぼんやりした表情から、どういふ立場におかれた女か、一応常識的にも想像されるらしかつた。

「東京の方ですね」

「はい」

話しかけてきた見知らぬ男に、とくに用心をするふうもなかつた。気味が悪いとも思わなかつた。会話はそれで切れた。桑子は窓の外を見た。

電車は勢いづいて闇の中を疾走した。電車が三滝川の鉄橋をわたつた。そこからいくらか速度が落ちて、やがて四日市駅の構内にはいつた。男はちよつと頭を下げて、立ち上つた。その車輛から下りたのが、桑子がいちばん後であつた。

改札口を出た桑子は、また時間表の下に立つた。降車客はすくなく、たちまち構内はがらんとした。夜の更けている感がつよかつた。売店はしまつていた。待合室の長椅子が背中合せに三、四組あつた。乗客とは思えない男が、椅子の上であぐらをかいていた。横になっている男もあつた。いずれもみすばらしい身なりであつた。

「蕪野にいく電車は、もうないでしょうか」

桑子は小荷物扱いのところへ、若い駅員に訊いた。

「明日の朝までないですよ」

桑子はトランクを下げて、時間表の下に立った。何度見あげてもおなじことであつた。途方にくれた。そのようすを待合室の外から、小柄な五十男がながめていた。男には桑子の行動が気になるらしかった。いったん構内を出たが、途中から引きかえしてきた。四日市内に行く先があるのなら、とくに若い女はいなくなっているはずである。若い女がひとり、待合室にとりのこされている。

やがて桑子は、待合室の長椅子にかけた。いかにも行くあてのないひとのように見えた。トランクを膝にのせて、その上に肘をつけて、床に視線を落した。その格好で駅で夜あかしをするつもりだろうか。男は待合室に入っていこうとした。が、思いとどまった。若い女が駅の待合室で、ひと晩をおくるといっただけでも、異様なことであつた。幸いこの待合室は二十四時間開放されていた。不審問を受けるのは、必至であつた。悪い奴がいい寄つて来るかも知れなかつた。五十男は迷つた。自分とあの娘は、赤の他人である。親切心から声をかけても、悪い奴と誤解されなこともかぎらなかつた。疑われ、危険視されて、そのあげくことわられては、ひっこみがつかなくなるのがおちである。五十男は長椅子を今夜のねぐらとかまえている浮浪者をながめやつた。そんな雰囲気の中に、若い女をひとりおいておくわけにかなかつた。男はあやしまれるほどの時

間をかけて、待合室のガラス戸越しに桑子をながめていた。若い女が待合室の入口にあらわれてくれたなら、案外自然に声かけられるかも知れなかつた。電車の中の隣の客の顔を、おぼえているであらう。男は、その機会を待った。が、若い女は動かなかつた。

五十男はあきらめた。ふりかえりながら駅をはなれた。親切心はあつても、それが強くなかつたのだ。誤解をおそれないほどの果敢さに欠けていた。桑子は自分が見知らぬ第三者に関心を持たれていることに気がつかなかつた。

東京を発つまでに十分調べておけば、途中の駅の待合室で、途方にくれることもなかつた。が、汽車の時間表を買つて来て、調べているひまがなかつた。桑子のまわりに、時間を調べてくれるものもいになかつた。調べようと思えば、出来たかもしれないが、気持の上にそれだけのゆとりもなかつた。

鳥が発つような旅立ちであつた。予定がたてられなかつたのは、いつも桑子がそうした状態におかれているせいだつた。桑子は、何ごともし自主的にふるまへなかつた。家族に向つて自己を主張したことがなかつた。二十一歳の今日まで、桑子はそういう環境におかれていた。

目白台に、水尾祐正の家庭があつた。そこから桑子は小学校に通い、中学、高校を卒業した。卒業したといつては、姉のきげんをそこねてしまふ。卒業させてもらつたといふべきであつた。

「桑子には、私のたったひとりの妹だなんて大きな顔をするんじゃないよ。私が両親の代りをつとめたんだからね。中学でやめさせてもよかったのを、高校まで出してやったんだよ。ありがたいと思わねば罰が当たるよ」と、たか子は口癖のようにいった。

「お菊さんはお手伝いだから、ちゃんと給料をはらってんだけど、桑子にはお小遣をやる必要はないんだよ。ほしければ、うちのものを何でも使つてよいのだから。お金のほしい時には、そういうえびいひのさ」

きものも服も、たか子のお古であった。たか子は、自分がくれたものをいぢいち克明におぼえていた。

桑子には、学校時代から自分の部屋というものがなかった。八十五坪の二階建てで、庭もかなりあった。女中部屋と隣り合った六畳の納戸が、桑子の寝間であった。納戸には簞笥やミシン台や衣箱があるので、せまかった。寝間に使用しているが、寝間らしい匂いを感じてはならなかった。幸い桑子は体臭がうすい方であった。

極彩色の地獄絵をみたあるひとが、阿鼻叫喚の亡者の悲惨なさまを馴れあいっこだと評した。亡者は苦しさに馴れて、むしろ秩序を保つために苦しみのそぶりを示しているようだといったが、地獄絵の制作の意図はそういうところにはないはずだった。最初の手術より二度目はこたえる。二度目より三度目はこたえるものである。人間の心理や感覚はそういうふうに出てくる。亡者が一万六千年もながいあいだおなじ苦しみを受けるというの、馴れるどころ

か、そのたびに苦しみが新たになるのだった。

小さいころから、姉の毒舌には馴らされてきたが、桑子は年ごろになるにつれて、姉の毒舌が身にこたえるようになった。毒舌に抵抗する要素が、自分の内にいつかつちかわれていた。

その朝の食事のとき、桑子は、

「菰野の大夫さんからは是非私に来てほしいといつて来まして。一身上の問題で、私がいかなければ解決がつかないことになっているというのです」

義兄の水尾も、たか子も、とっさにその意味をはかりかねる顔付になった。水尾が眼鏡ごしに、

「三重県の菰野にいくというのだね」

「桑子がひとりで行くの？」

「はい」

大夫武は、水尾祐正の大学の後輩であった。学生のところから、水尾家に入入りしていた。国立の大学を出てから、ある生命保険に入社したが、独身寮にはいり、昔のように水尾家に入入りしていた。大夫家の長男というので、田舎の両親は結婚をいそいでいた。そのことは水尾夫妻も聞いていた。かえりたがらない大夫だったが、気が弱くて、とうとう職をやめ、東京をはなれた。

「一身上の問題という、大夫さんの結婚問題？ それに桑子が何か重大な発言権をもっているというの？」

そういつている内に、たか子の表情がたかくなった。桑

子は、それを覚悟していた。感情的になると、姉の目尻が吊りあがるようになった。

「いつの間に桑子は大友さんと、そんな関係になつたの」

「関係だなんて……」

姉の自尊心を傷つけたのは、あきらかであつた。姉がこの問題にまともに相談にのつてくれないことははじめからわかつていた。

水尾家は、客が多かつた。水尾は印刷会社に勤めていた。四十三歳のかれは、やがて部長に昇進するはずであつた。

会社と同僚があそびにきた。同僚の細君が子供をつれてやつてきた。水尾の大学の後輩がきた。大友武は自分の友達をつれてきた。たか子の同級生の加茂香苗も、そのひとりであつた。ある製薬会社の宣伝部員をつとめている三崎徹も、仲間であつた。水尾夫妻はそろつて、客好きであつた。たか子は陽気であり、親切であり、客に差別をつけず、歡迎した。子供のない夫婦は、そんなことで何かを補っているのかも知れなかつた。以前は、水尾の大学時代の友達の仲代宏も常連であつた。近ごろは仕事が忙しいとみえて、顔を出さなかつた。集まる常連にとっては、地域的にも目白は足場がよかつたようである。みんなには、気のおけない、楽しい場所であつた。水尾家では、いつもたか子が中心であつた。たか子は、三十二歳であつた。美貌であり、色が白くて、どこか男のようなところがあつた。骨太で、大柄のせいだろうか。桑子とは、十一歳もちがつた。たか

子は、わが家に集まってくる男たちは、すべて自分に好意以上の感情をよせていると思ひこんでいた。

大友はたか子より六つ年下であつたが、水尾の後輩というのは口実にすぎず、常連となつてゐるのは、おのれの魅力のせいだとたか子は信じていた。水尾家では、桑子の存在がうすかつた。みんなが談笑したり、のみ食いしている席に桑子が同席することはすくなかつた。桑子には台所と座敷を往復する任務があつた。

花にあつまる蜜蜂の一匹が、氣紛れから別の花にとまつたようにたか子は桑子の話をきいた。自尊心が傷つけられたのに、がまんがならない。

「私たちの目をぬすんで、いつの間にか、お前たちはそんなことをしたのね」

「手紙のやりとりをしていて、大友君のようすは大体わかつてゐるのだらうね」

義兄がつづけていったが、たか子のような感情的ではなかつた。

「はい」

「その手紙をみんな、ここへもつておいで」

と、姉が命令した。

桑子が納戸で大友の数通の手紙を紙函から取り出してゐるとき、

「いまどきの若いものには、目がはなせないわ。何をするかわからないんだもの」

姉の声がきこえた。水尾はだまっていた。

姉がこわい顔をして、一通ずつ読んだ。たれに読まれても、大して迷惑はうけない手紙の内容であつた。大友には、許婚者があつた。が、許婚者が好きではなかつた。両親は式をあげることを迫っていた。気のすまない結婚をこのさい一刀兩断に解決するには、桑子にこちらに向向いてもらうより方法がないというのだった。その手紙には名古屋駅で近鉄にのりかえて、四日市から湯の山行電車にのればよいと書かれていた。

「桑子という女をみせて、こういう女が自分にはいるのだから、この結婚を思いあきらめてくれと、大友は切札に使うつもりだろう」

大友というとき、たか子はにくにくしげに呼びすてた。二度とたか子の口から、さんづけでは呼ばれないであらう。大友武は、裏切りものであつた。

「大友さんの困難な立場に私が何かのお役に立つなら、孤野までいってもよいと思います」

と、桑子は姉から水尾に視線を移した。

「大友君は気が弱い。強引に自分を主張することの出来ない人間だ。それが唯一の欠点だ。相手が強く出ると、いやいやながらも屈服してしまふ。金持の長男に生れているのだから、もっとわがままであつていいのだが、歯痒いようなどころがある。柄は大きいが、度胸がないんだね」

たか子が、結論を叩きつけた。

「いきたければ、いったってかまわないよ。その代りこ

ちらは関係ないことだからね。何もしてやらないよ。そんな義務もないからね」

桑子は頭を下げると、台所にひきさがつた。結婚生活の経験のある、三十六歳のお菊は、話をきいていた。だまつて、うなずいて迎えた。

「私、やっぱりいつてくるわ」

「いつてらっしゃい。気のすむようにいつてらっしゃい」

この家では、唯ひとりの桑子の同情者であつた。

「お姉さん、汽車賃を出さないつもりだわ」

「すこしぐらいなら、私がおたてかえます。こっそり旦那さまにおたのみになるといいですよ」

「お姉さん、泥棒に追銭の気持なんですよ」

「まさか」

笑つたが、お菊は首をすくめて、同意をしめした。お菊は水尾が会社に出るのを玄関に見送つたが、台所にひきかえすと、裏口から走り出した。

「駅のところで旦那さまに追いつきました」

と、千円札を何枚か桑子に手渡した。

「旦那さまは桑子さんの同情者なんですけど、奥さまの手前、大っぴらにふるまうわけにいかないのですよ」

義兄が自分の同情者とは思つていなかった。金を出したのは、水尾家の体面を重んじるからであつた。桑子に同情するのは、妻を裏切ることになつた。それは、水尾には出

来ない芸当であった。お菊にいわれて、水尾は金を出した。お菊の手前、水尾家の体面を保ったのだ。自分から進んで体面を保とうとはしない。桑子は昔から、義兄は姉とひとつ穴のむじなと思っていた。最近とはくにその傾向が強くなった。水尾家という家庭は、桑子と関係がないのである。水尾家は水尾祐正とたか子の二人だけのものではあった。そのやり方があまりに露骨であった。

お菊からも金を借りて、桑子は東京駅に来ると、いきあたりばったりの列車に乗った。四日市駅の待合室で立往生しなければならぬのも、自分がえらんだ結果であった。桑子はトランクに両肘をついて、頭を垂れ、目をつむった。眠気はすこしも感じなかった。これからのことを想った。こういう問題は、世間の事情に通じたひとが采配さいはいをふるべきであった。二十一歳の、経験の足りない、たよりない娘がのりこむ筋合ではなかった。しかし、桑子は交友の手紙を無視することが出来なかった。むつかしい立場におかれている交友を、気の毒に思った。自分に交友を救う力があるような気がした。しかし、どうすればいいのか、それはわからなかった。二十一歳の存在を、孤野という知らない土地へ持つていくだけのことであった。

「あんた、こんなところで夜を明かすつもりやな」と、頭の上で男の声がした。四日市なまりであった。

びっくりしたふうもなく、桑子は自分の前に立っているひとの顔を見あげた。知らない顔であった。がすぐ、電車

の中のとりの五十男であると気がついた。桑子は安心してように、にやりと口もとをゆがめた。

「こんなところで若い女が夜を明かしたら、ろくなことがあらへん。おまわりさんとがめられるわ。もう何か訊かれたんとかがうか」

まる出しの四日市弁に、桑子は面くらった。電車の中では標準語を使っていた。

「どこへいきなさる？」

「孤野へまいります」

「湯の山行は、明日の朝でないと出えへんわ。むちゃや、こんなところで若い女がひとり夜を明かそうなんて……」

「宿屋がどこにあるか知りませんし、四日市には知合もありませんので……」

「わしについておいなはれ。悪いようにはせえへんわ」と、五十男が待合室の出口に向けて歩きかけた。桑子は立ち上った。男は桑子が待合室で夜を明かそうとした向うみずを、怒っているようであった。悪意のあるひととは思われなかった。

「桑子はここが足りないから」と、姉のたか子は頭を指して、「かんとんにひとにだまされてしまう。ひとのことを、すぐ信じてしまうんだから。疑ってかかるということを知らない子だよ」

口答えは出来ず、そういうわれても桑子はにやにやしているだけで、自分がひとより劣っているとは思わなかった。